まえがき

「山谷」がまた鳴動したという。並び称される「釜ヶ崎」にも、怒りのエネルギーが内包されている。巨大な無責任体系のなかで忘れられた「底辺」は、激発的な行為をもって、「昭和元禄」に浸る人びとに、その存在の確認を迫っている。

この未熟なアンソロジーには、主として、昭和三六年から四一年にかけて書き綴った論稿が収められている。ほとんどは、一種の「課題作文」としてテーマを与えられ、それぞれ場と時を異にし、また異なる読者を念頭において、書かれたものである。その意味で、本書は体系性と一貫性を欠き、部分的な重複・不斉合・矛盾をも含んでいる。とりわけ残念なのは、数字のすでに古くなった部分が多く、また、最新の資料にもとづく〈釜ヶ崎総説〉を書き加える余裕を持たないことである。

にもかかわらず、論集を編むなどというおこがましい営みを、結局のところ思い止まらなかったのは、なかばは外的な条件と、なかばは内的な動機によっている。なによりまず、さまざまな事情から一つの曲り角に至った自分としては、このあたりで、おぼつかない歩みのあとを振り返り、広く叱正と助言を仰ぐ必要があった。もちろん、間歇的な激発によってしかその存在への強い関心を喚起しえぬ底辺の、言葉なき怒りの基盤を、新たな今日的状況の中で再確認しなければならない——という心情もはたらいている。

加えて、転機を迎えた日本の社会学界は、その理論的混迷からの脱出の希望を、方法論をめ

大阪市立
123004
中央図書館

ぐる論議の中に、見いだそうとするかのごとくである。そこでは依然として、瑣末実証主義と論壇事大主義、図式観念論と空論偏執狂が、あとを絶っていない。だが、およそ、「理論」と云い「方法」と云うかぎり、それは、奥深い〈歴史的現実〉への肉迫を通じてのみ、理論たり方法たりうるのである。その意味では、今日なお、わが国の社会学にとって、一般理論と個別資料を媒介すべき「中範囲」の研究が持つ意義は、決して少なくない。こうした学問的状況にあっては、この習作集も、なにがしかの役割は果たせよう。

社会学界では「社会体系論」が、論壇では「大衆社会論」が流行し、他方、街頭では、「安保闘争」が展開されていた頃、私は、インテリゲンチャ研究と平行して、西成ドヤ街の日雇労働者の中に、サン・キュロット的な可能性を探ろうとしていた。こうして始まった〈現実社会学〉への私の道は、いわば、薄暗い間道の独り歩きであり、曲りくねった異端の歩みであった。とは云え、社会学に対する全面否定論にくみしていたわけではない。ただ、実感のパトスとからみ合ったマルクス主義的な問題意識にもとづき、新制高校の頃からふれていた経済学のおぼろげな知識を手がかりとしつつ、それに若干の近代社会学的な概念をつけ加えて、我流の社会学への手探りを続けてきたにすぎない。

したがって、細部にわたって精読されれば明らかなように、「正統マルクス主義」でもなければ「ブルジョア社会学」でもない。むしろ、分析ツールの吟味をしながら、経済学と社会学、社会問題論と社会構造論、労働問題とスラム問題の交錯しうる地点に、巨視と微視、抽象と具象の双眼を向け、都市底辺の一端の輪郭を彫り上げるべく、ときには、歴史と統計と文学の助けをも借りたわけである。

しかし、能力の乏しさは、この意図を裏切ってしまい、栄養不良の幼児同然の己が姿をさらけ出すことになった。心残りは余りに多いが、〈人間論〉＝〈生活論〉への本来的な関心が禁欲されすぎ、また、いささか公式的な「体制還元」的傾向も露出しているうえ、基本的問題を強調するあまり、細部の精説が怠られている――という点が反省される。もちろん、底辺での生活と実践の体験的な裏づけの稀薄さによる制約については、論をまたない。そこで、分析方法の欠陥と現実認識の誤謬を指摘して頂くことを、読者諸賢にお願いする次第である。

ようやく社会学への門をくぐったしるしとも云うべき、この試論集へのはしがきを終えるにあたって、情緒不安定で怠け者の私を、つねに好意と温情で包んで下さったすべての方に、心からお礼を申し上げたい。恩師臼井二尚先生をはじめ、研究の場を与えて下さった中本博通・雀部猛利両教授、大阪社会学研究会の諸先輩はもちろんのこと、とりわけつねに助言を頂いた仲村祥一さんにたいしては、御厚情に報いえぬことをただ恥じるのみである。

ドヤ街で知り合った年上の畏友・桝井啓智さんの装幀に恵まれ、警世の情熱家・今田保さん主宰の若き汐文社から刊行されることも、私の大きな幸せである。また、編集部の藤井和泰さんにも、ひとかたならぬお世話になった。末尾になって恐縮ではあるが、これらの方たちにも厚く感謝の意を表したい。

著者

目次

第一部　社会病理学の反省と課題……七

Ⅰ　社会病理学の歴史と転回……八

Ⅱ　社会病理学の対象……三五
——新しき胎動の素描——

Ⅲ　社会問題の研究方法……四四
——認識と実践の結合をめざして——

第二部　スラム問題の存在と意義……一〇一

Ⅰ　スラム的労働の実態……一〇二
——一九六〇年における「釜ケ崎」失対労働者の場合——

Ⅱ　都市自由労働者の居住形態……一二四
——一九六二年における「釜ケ崎ドヤ街」の場合——

Ⅲ　現代日本のスラム問題……一四七
——一つの短いおぼえ書き——

Ⅳ　スラム現象の基本的視点……一九一

第三部　都市問題の基底と背景……二〇五

Ⅰ　アメリカのスラム……二〇六
——その歴史と現状——

Ⅱ　「部落」と「スラム」……二二三
——貧困と差別の社会学——

Ⅲ　都市貧困層の存在形態……二五四

Ⅳ　極貧層の堆積とその背景……二七一
——むすびにかえて——

補　録

「社会病理学」の現実と可能……二八四
——好事家的雑学からの解放をめざす一つのエスキス——

装幀　桝井啓智

＜収録論文リスト＞（発表時期の順）

「スラム的労働の実態」（ソシオロジ、8巻3号、昭和36年）
「社会病理学の現実と可能」（社会問題研究11巻4号、昭和37年）
「都市自由労働者の居住形態」（同右、12巻4号、昭和37年）
「現代日本のスラム問題」（同右、13巻2号、昭和38年）
「＜部落＞と＜スラム＞」（仲村・居安・筆谷編「現代社会学ノート」汐文社・昭和40年）
「都市貧困層の存在形態」（藤岡編「現代都市の諸問題、地人書房、昭和41年）
「社会病理学の歴史と転回」（大橋・大藪編「社会病理学」、誠信書房、昭和41年）
「社会問題の研究方法」（馬原・小関・真田・仲村編、講座「現代日本の社会問題」第1巻、汐文社、昭和41年）
「極貧層の堆積とその背景」（同右、第2巻、汐文社、昭和41年）
「スラム現象の基本的視点」（都市問題研究192号、昭和41年）
「アメリカのスラム」（「少年補導」、昭和41年12月号）
「社会病理学の対象」（昭和43年）

368

小関三平（こせきさんぺい）

1934年　生まれる
1958年　京都大学文学部卒
現　在　立命館大学産業社会学部助教授
論　文　「19世紀ロシヤ・ニヒリストの一原像」
「体制と人間像」・「サン・シモンの＜産業者教理者問答＞」など。

昭和43年7月10日　発行　定価 690円

著者　小関三平
発行者　今田保
印刷者　今川明
発行所　汐文社
京都市下京区七条河原町西南角
東京都足立区栗原町809